地味な機能の高速振動

バズーカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地味な機能の高速振動

【Ｎコード】

Ｎ３２８０Ｍ

【作者名】

バズーカ

【あらすじ】

超能力者を教育する学校、「県立旭が丘高等学校」の１年生、妙（みょう）義秋羽（ぎあきは）は、自分の能力に不満を抱いていた。産まれたときから彼女が備えていた特殊能力、それは自身の身体を「高速振動」させることだった・・・。

プロローグ

「よぉい、始めっ！」
先生のかけ声で生徒が「的」へ走り出す。

「おりゃー！」
ある男の子は手を的へ向けて炎を発し、
「ええぃ！」
ある女の子は冷気を出して的を凍りづけにする。

オレは・・・的を前にして、拳を握りしめていた。

「ん？なんだぁ？秋羽はサボりかぁ？」
先生がニヤニヤしながらオレに近づいてくる。
「お前ももっとがんばらないと、落第しちまうぞ？」
知るか。オレは先生のにやけ面から逃げるために、体育館から出て行った。

超能力者を集め、教育し、世の中に役立つようにする学校、「県立旭が丘高等学校」。
全国、いや世界各地から集められた特殊な能力を持つ者達が、日々訓練に明け暮れている。
一口に超能力と言ってもいろいろある。
さっきのように炎を出す、冷気で凍り付けにする、水を操る、電気を発する等々、
全員が違う能力を持っていた。
しかし中には、どう役に立てていいのか分からない能力も存在する。
オレのような奴のことだ。

第一話　「てめぇら、ヴァイブレードって知ってるか？」

６月３０日　晴れ
今日は体育館で全体訓練がありました。みんな思い思いの能力で的を攻撃していました。私は体調が悪かったので、見学させてもらいました。次はちゃんと参加できるよう、体調を整えておこうと思います。

・・・我ながら口から出任せがすらすらとよく出てくるモンだ。
オレは今日日直だった。放課後一人教室に残って窓を閉め、電気を消し、今学級日誌を書き終わったところだ。
あとはコイツを先公に提出すれば今日のお仕事は終了だ。
オレはちゃっちゃと帰りたいがために、廊下を小走りで職員室へ向かった。
職員室の前に着いたとき、中から声が聞こえた。
「・・・そうなんですよ！秋羽は能力を見せろと何度言っても仮病で休むんです！私もあいつには手を焼いておりまして・・・」
担任の先公だ。職員室で堂々と生徒の悪口を言うとは、さすが学校きっての嫌われ教師である。
デブな体型にいつも脂汗をしたたらせてジャージで学校を闊歩するその様は、「立体の暴力」と呼ばれている。
しかしオレは別に悪口についてはどうとも思わなかった。オレが役立たずなのはオレが一番知っている。
ともかく、学級日誌を提出することが先だ。
オレはドアを２回ノックし、ドアを開け、口をあけた。
「１年Ｃ組の妙義秋羽です。学級日誌を提出しに来ました。入ってもいいですか？」
「・・・それでですね、・・・！あ、秋羽！」
夢中で話をしていた先公は、しまったという顔をしたあとに

「あ、あぁ、いいぞ」
「失礼します」
オレは職員室へ入り、先公の机に少々乱暴に学級日誌を置いた。
先公の汗の臭いが鼻につく。
むせかえるようなその臭いはオレの神経をさらに逆なでた。
オレは何も知らないというように
「先生、さっき入り口で私の名前を呼んでいましたか？」と聞いた
先公はとぼけた顔で
「いやぁ？そんなことはないぞ？」
もういい。
オレは職員室の出口へ向かい、先公に顔を向けて
「失礼しました」
と頭を下げてさっさと出て行った。

・・・最悪な日常、いや、日常が最悪と言うことは、最悪という物も存在しないか。
そんなどうでもいいことを考えながら、オレは帰路についた。
夕焼け空の下を一人。
帰る途中、公園の横を通りかかった。
「いやっ助けてっ」
悲鳴だ。
「へへっまさかこんなにかわいい娘がこの街にもいたとはな！捨てたモンじゃないぜ！」
「だな！」
どうやら相手は複数人の男だ。襲われているのはオレよりも小柄な女の子・・・。
ま、オレは関係ない。面倒ごとに巻き込まれるのはごめんだ。
「あ、そこの！助けてっ！」
女の子はオレに気づいたようで、オレを呼んでいる。
オレは振り向かなかった。今までだってこういうことで手をさしの

べたせいで、オレは損し続けてきた。
「ちょっと！か弱い女の子がごつい男に取り囲まれてるのよ！男ならなんとかなさい！！」
・・・！？
このアマ。
「今・・・なんつった？」
「え？」
女の子はオレの突然の反応に驚いたようだ。
オレは公園へ足を踏み入れた。当然、男達もオレに気づき、
「なんだぁお前？まさか正義のヒーローとでもいうんじゃねーだろうなァ？」
親分みたいな大男がそう言うと、子分のような奴が
「まっさか！こんなひ弱な男が親分に突っかかってくる分けないッスよ！」
こいつ等・・・！オレのコンプレックスをこいつらひっかきまわしやがって・・・っ！
「かかって来いよ！ぼ　く　ち　ん　？」
男達はそう言ってげらげら笑い始めた。
オレは、顔を真っ赤にして言った。
「オレは女だ！！」
そりゃ、黒髪のショートで胸もないけどさ。
「女ァ？コイツ女だってよ！」
親分がそう言って笑うと子分も笑った。
「まったく色気もクソもねぇ女だな！それともなんだ？いっしょにヤりてぇってか？」
オレは最初は恥ずかしいだけだったが、今は怒りに変わった。
「てめぇら、ヴァイブレードって知ってるか？」

第二話「1発は1発だ」

「てめぇら、ヴァイブレードって知ってるか？」

オレの問いに、笑っていた男二人は硬直した。どうやら知っているようだ。

「知らないなら教えてやるぜ？」

オレは右手の指を気をつけの姿勢のようにピンとのばした。

そして、右手に思いっきり力を入れる。

・・・ぶるぶるぶる

右手が震え始めた。まだだ。まだまだ・・・

「お、お助けください！！」

子分のような男は情けなく土下座している。

親分はオレをずっとにらみ続けていた。

その間にも、オレの右手は加速しつづける。

最初はぶるぶるしていただけだった右手が、キィィィンと飛行機のような掃除機のような、そんな音を立て始めた。

戦闘態勢が整ったのだ。

それをみて親分が口を開いた。

「噂のヴァイブレードがこんなナベ野郎だったとはな！俺の力を証明するチャンスだぜ！」

親分はそう言うと、足を大きく開き、手を左右に広げ、気合いを入れた。

「うおおっ！」

その親分の構えに、子分は
「お・・・親分が力を使うぞ！逃げろぉ～！！」
と叫んで公園から走って逃げていった。

「・・・てめぇも能力者か」
オレは予想はできていたが、一応驚いたように言った
「へへへ、高校に行ってる奴だけが強えぇと思うなよ！」
その時、オレの足下にあった石ころが、突然親分に向けて飛んでいった。
そしてその石ころは、親分の腕にひっついた。
どうやら石を操る能力らしい。

いつの間にか親分の両手はまるで岩を砕いて作った芸術のように、
すっかり石に覆われていた。
どうやら準備は整ったようだ。

「いくぜぇ！まずはご挨拶だ！！」
親分が右手で地面を殴った。
その衝撃にオレはたじろいでしまった。
その隙に親分が見かけによらない素早い動きで距離を詰める。

「オラァ！！」
親分は大きく跳躍すると、オレに向けて石に包まれた右ストレートを見舞ってきた。
オレは不意をつかれ、その強烈なパンチを左の頬に食らってしまった。
オレは大きく吹き飛ばされ、土煙をあげながら地面に倒れた。
意識が急速に遠のいていく・・・

「おいおい、まだご挨拶だって言ったろう？」

親分が笑いながら近づいてくる。
だが親分の言ってることはオレには半分も理解できていなかった。
脳浸透でそれどころではないのだ。

親分は倒れているオレのすぐ横まで歩み寄ると
「まだまだ遊び足りねぇが、お別れだぜ！」
と右腕を大きく振り上げた。

「・・・一発は一発だ」
オレは絞り出すように言った。
しかしオレの言葉などお構いなしに親分のパンチが迫る。

ズドンッ

オレは間一髪、首を振って親分のパンチをかわした。
「なっ・・・っ！？」
親分はこの距離で自分のパンチが外れたことに驚愕した。
親分の明らかな隙である。
オレは右手を手刀のようにして、親分の右肩へ突き刺した。

ごろん、と重い音が鳴った。
親分は何の音だ？と自分の右腕を見て、苦痛の叫びをあげた。

「言ったろ、一発は一発だと」
親分は痛みに転げ回っている。
親分の横には、未だ石を纏ったままの右腕が、空しく転がっていた。
親分が転げ回っている地面は、親分のおびただしい出血で真っ赤に染まっている。

「救急車を呼べ。オレは助けないけどな」

そう言ってオレはくるりと踵を返し、公園の蛇口へ向かった。
何しろアイツの血液がオレの右腕を汚しているのだ。
オレが親分の血液を洗っていると、「ゲフンゲフン」と声がした。
オレが振り返ると、そういえば今回の事件の発端となった、あの女の子が立っていた。
見たことのないセーラー服を着ている。
「なんだ？逃げてなかったのか？」
「だって・・・私を庇ってアンタは・・・」

・・・なんかやけにもじもじしてるな。

「そ、そう！お礼！お礼しなくちゃ！！」
「はぁ？礼なんかいらねぇよ」
オレは公園の出口へ歩いていく。
女の子はオレの前まで走ってきて
「ちょっと！このアタシが礼をしてあげるっていってるのよ！少しは感謝なさい！！」
と顔を真っ赤にして怒った。

・・・めんどくせぇ。これがいわゆるツンデレというものだろうか

「ねぇ！ちょっと！聞いてる！？」

どういうつもりなのか、オレは女の子を華麗にスルーして帰ろうとしているのだが、女の子はオレにずっとつきまとってくる。

そうこうしてる内にオレの家に着いた。
オレはさすがに女の子に向き直り
「おい、まさか家の中にまで着いてくる気じゃないよな？」

といった。
すると
「お礼がすむまでの間はアンタを追い続けるわ！！」
といって走ってどこかへ行ってしまった。

・・・なんだあいつ？
オレはなんとなくあの女の子が印象に残ってしまった。

第3話「オレはまったくどうしようもないくらいのバカだな」

翌日・・・

オレは頭を抱えていた。

「・・・アタシはね、アンタに貸しを作っておくのはぜぇったいにヤなの！」

この隣りの女のせいで・・・

「ねぇ！ちょっと！聞いてるの！？」

今朝のホームルームでのことだ。

先公が出席を取った後に珍しく口を開いた。

いつもなら挨拶して終わりなのに？

「え～、今日は転校生が来ている。入れ」

ガラッと激しい音をたてて扉が開かれた。

オレは音の鳴った方を見て思わず声を上げそうになる自分を必死に押さえた。

ツカツカと靴音を鳴らして黒板の前に立った少女は、

黒板に名前を書き始めた。

そしてこちら側に振り向き、

「早乙女　春花よ！よろしく！！」

と元気な挨拶をかましてきたのだった・・・

オレは訳が分からなかった。

なんであの女がこの学校に？ってことはあの女も結構能力が高いんじゃ・・・？いや、あの様子からしてそんなことは・・・

オレが混乱している間にも、春花と名乗った少女は自己紹介していた。

「・・・１６の時アフガニスタンで６番目の母親に拾われて・・・」

・・・どんな人生送ってきたんだ？こいつ？

「・・・というわけで能力が見込まれて転入してきたの。よろしくね！」

と少女は生徒諸君ににっこりとイイ笑顔を送ってきた。

女子生徒は突然現れたやけに馴れ馴れしいこの少女への反応に困っている。

男子生徒は・・・相変わらずだ。

「はーい、しつもーん！彼氏はいるのー！？」

男子がおちゃらけ口調で聞く。

周りもそれに乗ってはやし立てる。

オレは馬鹿馬鹿しい質問だ、と思いつつも、内心は早乙女春花の反応に期待していた。

その問いに早乙女は、顔色一つ変えずに答えた。

「言ってもいいけど、あんた等全員殺すわよ？」

クラスが凍り付いた。

早乙女春花だけが、にこにこと愛想笑いをしている。

やけに長い静寂の後、先公が遠慮がちにしゃべった。

「ま、まぁ冗談は休み時間にして、早乙女をどこに座らせようか・・・」
・・・たぶんアイツのは本気だと思うが。
オレは安心した。よかった。オレの横は空いていない。オレの横には居内　貴矢裸という空気男が・・・
「・・・お！あそこが空いてるな。よし早乙女、あそこに座れ」
「はい。」
オレは寝る体制に入った。アイツが話しかけてきても無視する為だ。しかし、
「・・・よっこらしょっと」
左隣から女の声。
オレはまさかと思いつつ左隣を見た。するとそこには早乙女春花がすわっているじゃないか！？
これには思わず声がでた。
「な、ちょ、えええ！？」
先公がオレに注意してきた。
「なんだ？うるさいぞ秋羽？」
先公に助けを求める。
「先生！だってここには貴矢裸が・・・？」
そうだ。居たはずだ。あの空気男が。
「貴矢裸？あぁ、アイツなら昨日転校したぞ」
その瞬間、オレの心の中は絶望でいっぱいになった。
そういうわけで、今日は最悪な一日、もとい最悪な日々の始まりである。

もとからそんな感じだったが、今はさらにその上をいく最悪さである。

早乙女春花はしつこかった。
休み時間はもちろん、授業中には手紙で、「お礼をさせろ」としか言わない。
面倒なので無視しているのだが、こいつは引き下がろうとしない。

結局また帰り道がいっしょになった。
「ちょっとぉっ、待ちなさいっ！！」
間延びしたこの声、口調、何もかもがオレをイライラさせる。

オレは彼女を離そうと歩く速度を上げた。
彼女はしゃべりながらついてくる。

身長で勝るこちらの方が有利なのは明らかだ。
オレは路地を右へ左へ、デタラメに曲がった。
なんとなく、彼女は方向音痴な気がしたのだ。

「・・・もぅっ　まちなさいってー！！」

遠くから彼女の声が聞こえる。このまま行けば逃げ切れるかも知れない。

とその時、

「待ちなさ・・・キャッ！？」

オレを追って絶え間なく続いていた声が唐突に途絶えた。
オレは立ち止まって耳を澄ました。

しかし彼女の声は聞こえない。
オレは自分が馬鹿らしかった。まただ。オレはまた他人を心配している。
オレは他人のために働くたびに貧乏くじを引かされる。
あの女がいなくなったいい機会じゃないか。
そう、必死に自分に思わせようとした・・・・が

「・・・オレはまったくどうしようもないくらいのバカだな」
オレはさっき通ってきた道へ向き直り、走りだした。

第四話「コイツ・・・方角・・・なのか？」

オレがいくら走っても、春花の姿は見えてこなかった。
時間が経つにつれ、オレの中の不安は次第に大きくなっていった。
このあたりは治安が悪い。街の中心部は警察が巡回しているのだが、１０分も歩けば所々にこのような狭い路地がたくさんある。
ここは警察もたまにしか巡回しておらず、ごく稀に行方不明者がでる時もある。

オレは走った。彼女の痕跡を求めて。
走りながら、何故オレはこんなにも必死になっているのだろう、と思った。

彼女はオレにつきまとってきた。はっきり言うとウザいタイプの人間だ。
しかし、今まで彼女ほどオレに突っかかってきた人間がいただろうか。

皆オレの噂を聞くと、オレに近づかなくなる。
オレは、その状況を自分で造り出しているのだ、と思っていた。

しかし、早乙女春花という人間の登場によって、その考えは崩れた。
彼女はオレがどんなに突き放そうとしても、オレと話をしようとしていた。

オレは、寂しかったのだろうか？

誰かに必要とされたかったのだろうか？
彼女に会って、確かめなければならない。
オレが狭い路地を走っていたとき、遠くからかすかに声が聞こえた。
「助け・・・」
「！・・・春花っ」
間違いない、春花の声だ。
何故そう確信できたのかは分からない。
しかし、オレの体は、声の方へ走り出していた。
しばらく走ってオレは息を切らしていた。
どこだ？どこにいる？春花？
すると、突然オレの右腕が唸り始めた。
ヴヴヴッ・・・
「何だ・・・！？」
オレは原因不明の事態に立ち止まった。
ヴヴヴッ・・・ヴヴ・・
右腕は不規則に震えている。
こんな事は初めてだ。
腕を左手で押さえてみても、勝手にぶるぶると震える・・・
いろいろ試している内に、あることに気がついた。

「コイツ・・・方角・・・なのか？」

方角によって振動速度が変化している。

「オレの能力も・・・彼女と会いたがってるってのか？」

オレは自分の能力に半ば呆れながらも、ひどく感謝した。

オレは迷わず、腕の振動が一番早くなる方角へ、走った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3280m/

地味な機能の高速振動

2010年10月8日23時10分発行